

2025年4月6日

四旬節第5主日

菊地 功 枢機卿 メッセージ

ヨハネ福音は、「姦通の現場で捉えられた女」の話を伝えています。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」というイエスの言葉がよく知られています。もちろんこの場において、本当に罪を犯したことの無いものは、神の子であるイエスご自身しかおられません。さすがに神に挑戦するような思い上がった人は、当時の宗教的現実の中で、そこにはいなかったと福音は伝えています。

しかし同じことが、今の時代に起こったとしたらどうでしょう。とりわけ、バーチャルな世界でのコミュニケーションが匿名性の影に隠れて普及している今、同じことが起きたのであれば、あたかも自分こそが正義の保持者であるというような論調で、この女性を糾弾する声が多く湧き上がるのではないのでしょうか。何という不遜な時代にわたしたちは生きているのでしょうか。時にその不遜さは、自分が虐げている弱い相手に対して、自分に対する感謝が足りないなどと、さらにとんでもない要求すらして相手を糾弾します。

この福音の物語は、時代と文化の制約があるとはいえ、共犯者であるはずの男性は罪を追及されることがなく、女性だけが人々の前に連れ出され断罪されようとしています。同じ罪を形作っているにもかかわらず、女性だけが批判される構図は現代でも変わりません。それどころか、ハラスメントなどの暴行や虐待の事案にあつて、あたかも被害者に非があるかのような批判の声が聞かれることすらあります。

神の愛といつくしみそのものであるイエスは、犯された罪を水に流して忘れてしまうのではなく、ひとり責めを受けいのちの尊厳を蹂躪されようとしている人を目の前にして、その人間の尊厳を取り戻すことを最優先にされました。もちろん共同体としての秩序と安全を守ることは大切ですし、社会においてもまた宗教共同体においても、掟が存在しています。

イエスの言葉は、掟を守ることに価値がないとは言いません。イエスの言葉は、掟が前提とするひとり一人の人間の尊厳に言及しています。なぜならばその尊厳ある一人一人が共同体を作り上げているのであって、共同体が人を作り上げているからではありません。イエスは、そのような場に引き出され、辱められ、人間の尊厳を蹂躪されている女性の、そこに至るまでの状況を把握することもなく、掟を盾にして尊い賜物であるいのちの尊厳をないがしろにしている現実のただ中で、一人のいのちの尊厳を守ろうとしています。その存在を守ろうとしています。わたしたちの時代は、誰を、そして何を最優先にしているのでしょうか。

今年の四旬節メッセージ「希望をもってともに歩んでいきましょう」で教皇様は、回心について三つの側面から語っておられます。その三つ目のポイントは、約束に対する「希望をもって」とともに歩むことですが、教皇様はそこにこう記しています。

「回心への第三の呼びかけは、希望への、神とその大いなる約束である永遠のいのちを信頼することへの招きです。自らに問いましょう。主はわたしの罪をゆるしてくださると確信しているだろうか。それとも、自分を救えるかのように振る舞っているのではないだろうか。救いを切望し、それを求めて神の助けを祈っているだろうか。歴史の出来事を解釈できるようにし、正義と兄弟愛、共通の家のケアに務めさせ、だれ一人取り残されることがないようにする希望を、具体的に抱いているだろうか」

わたしたちは、神からのゆるしをいただいて生かされていると心に刻むとき、神の前で謙遜に生きることを学びます。神の前に謙遜になるとき、はじめて、同じ神の愛によっていのちを与えられ生かされている兄弟姉妹と、ともに歩むことの大切さを理解することが可能になります。ひとり一人の人間の尊厳を尊重し、虐げられている人の尊厳を回復しようとする主のいつくしみに倣いましょう。